

大和物語

百四十五

昔むかし、平城の帝に仕つかう奉まつる采うね女めありけり。顔かほ容貌貌甚たちいみ

じうきよ清らにて、人々ひとぐよばひ、殿てんじやうびと上人などもよばひ
けれど、逢はざりけり。其の逢はぬ心こころは、帝を限みかどかぎり

なく目出たき者ものになん思おもひ奉りける。帝召してけ
り。扱さてのちまた後又も召さざりければ、限かぎりなく心憂こころうしと思おも

ひけり。夜昼よるひるこころ心に懸かかりて覚え給ひつゝ、恋しく佗わび

しく覚え給ひけり。帝召しきかど、事こととも思おぼさず、

さすがに常に見みえ奉まつる、猶ほ世よに経まじき心地こゝち

しければ、夜密よるみそかいに出でて、猿沢さるさわの池に身みを投げて

けり。斯かく投げつとも、帝は得知し召さざりける

を、事のことの序ついでありて、人の奏ひしければ聞きこめし召してけ

り。いと甚あはれ哀がり給たまうて、池の辺ほとりに大行幸おほみゆきし給たま

うて、人々に歌詠ませ給ふ。柿本人丸、

わぎも子がねくたれ髪を猿沢の

池の玉藻と見るぞ悲しき

と詠める時に、帝、

猿沢の池も辛しなわぎも子が

と詠み給うける。扱此の池に墓せさせ給うてなん、

玉藻潜かば水ぞ乾なまし

帰らせ御座しましけるとなん。

百四十六

同じ帝、立田川の紅葉いと面白きを御覽じける

日、人丸、

立田川もみぢ葉流る神南備の

三室の山に時雨降るらし

帝

立田川紅葉乱れて流るめり

渡らば錦中や絶えなん

とぞ遊ばしたりける。

百四十七 同じ帝、狩いと畏く好み給うけり。陸奥国岩手

郡より奉れる御鷹、世に無く賢かりければ、二な
う思して御手鷹にし給うけり。名をば岩手となん

附け給へりける。其れに彼の道に心ありて、預り
仕う奉り給うける大納言に預け給へりける。夜昼
之れを預かりて、取飼ひ給ふほどに、如何がし給
ひけん、逸し給うてけり。心肝を惑はして覗むる
に更に得見出でず。山々に人を遣りつゝ覗めます
れど更に無し。自らも深き山に入りて、惑ひ歩き
給へど甲斐も無し。此事を奏せで暫しも有るべ

けれど、二日三日にあげず御覽せぬ日なし。如何せんとて内裏に参り、御鷹の失せたる由を奏し給ふ時に、帝物も宣はせず、聞し召し付けぬにやらんとて、又奏し給ふに、面をのみ守らせ給うて、物を宣はず、怠々しと思したるなりけりと、我れにも有らぬ心地して、畏まりて在すかりて、此の御鷹の覓むるに、侍らぬ事如何様にかし侍らん、などか仰事もし給はぬと奏し給ふ時に、帝、言はで思ふぞ言ふに勝れる

と宣ひけり。斯くのみ宣はせて、他事も宣はざりけり。御心にいと言ふ甲斐なく惜しく思さるゝになんありける。之れをなん世の中の人、本をば左右附けゝる、旧は斯くのみなん有りける。

平城の帝位に御座しましける時、嵯峨の帝は坊に

御座しまして、詠みて奉り給うける、

皆人の其の香に愛づる藤袴

帝
御返し、
君
が御為と手折りつる今日

折る人の心に叶ふ藤袴

うべ色毎に匂ひたりけり